ISSN　0917－3609

明日への文化財

小特集　21世紀の文化財の運営と活用

ヨーロッパにおける遺跡の管理・運営・活用の現在形　　粟野　隆　　3

「平和・交流・共生」の理念が活きるＮＰＯの活動と地域づくり
愛沢伸雄・池田恵美子　　16

最近話題の遺跡

大隈串良　岡崎18号墳　　橋本達也　　30

博物館案内

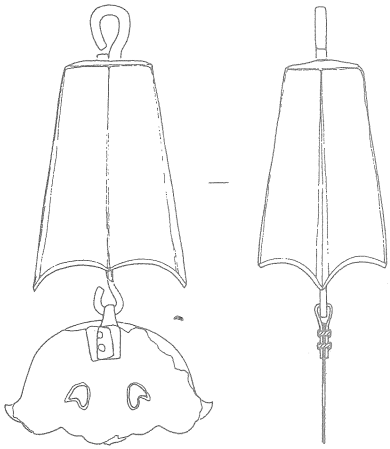
但馬国府・国分寺館　　前岡孝彰　　38

連載講座

古墳の話　第２回　　石部正志　　44

訃　報

葛野豊さんを偲ぶ　　石部正志　　52



文化財保存全国協議会編集　　2006年９月　56号

岡崎18号墳１号地下式横穴墓の竪坑（本文30ページ）

最近話題の遺跡

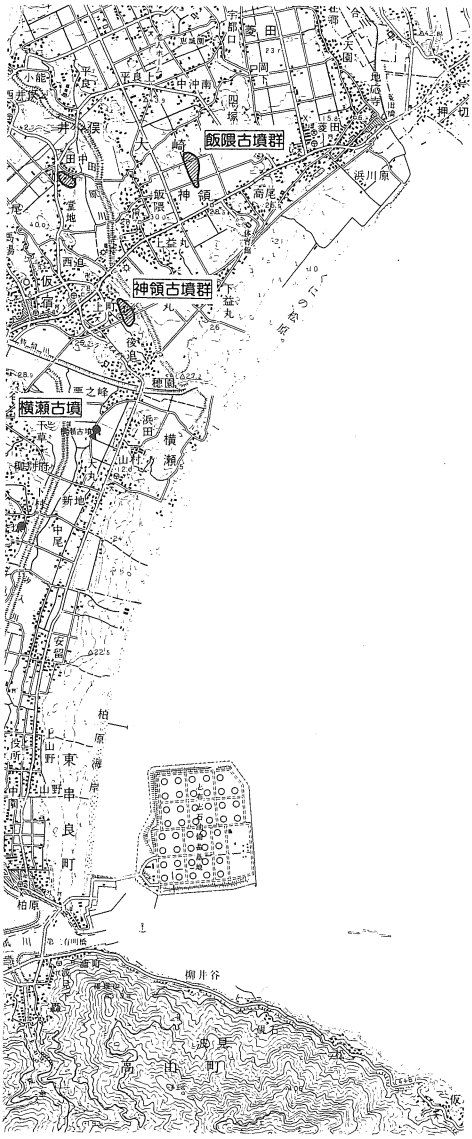
大隅串良　岡崎十八号墳

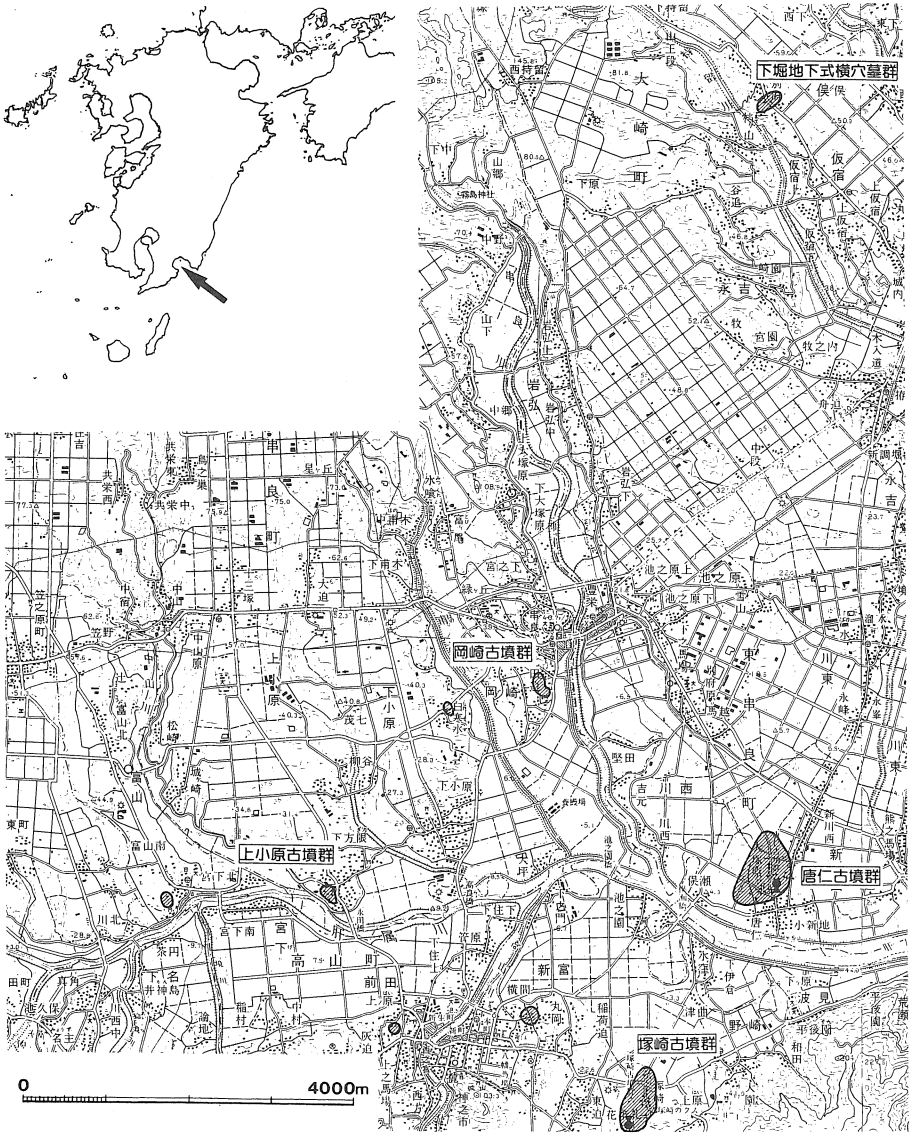
橋本達也

一　岡崎古墳群の調査

発掘調査に至る目的と経緯　鹿児島県鹿屋市（旧・肝属郡串良町）岡崎古墳群では数次の発掘調査が実施され、古墳時代中期を中心とする古墳群であることが確認されている。なかでも、木棺直葬の円墳・岡崎四号墳では周溝部に従属する地下式横穴墓を検出し、十五号墳では箱式石棺から甲冑（かっちゅう）が出土するなど南限域の古墳時代社会を考察する上で多くの成果が得られていた。

これらの重要性を鑑みて、二〇〇二～二〇〇三年度にかけて鹿児島大学総合研究博物館では当古墳群において四次にわたる学術調査を実施した。調査は十八号墳・二十号墳の発掘調査、十五号墳測量調査を実施したが、ここでは十八号墳の成果を紹介する。





岡崎古墳群の位置

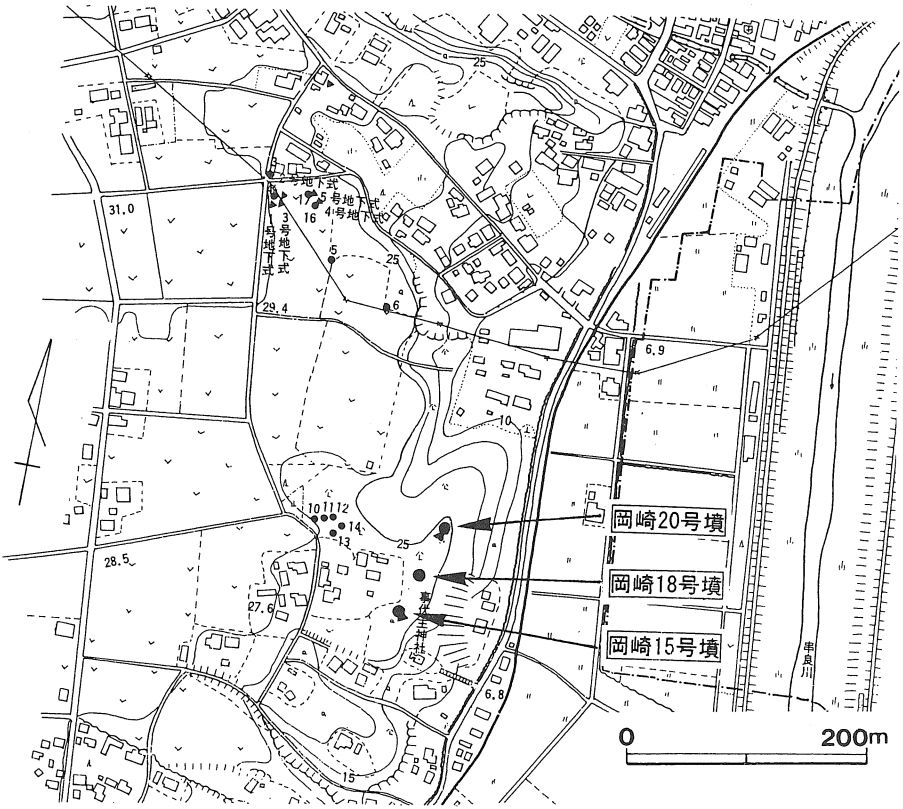
古墳群の立地　岡崎古墳群は肝属平野の西を画するシラス台地上の縁辺部に現状で二〇基ほどの古墳からなる。

なかでも岡崎十五・十八・二〇号墳は一定の空間をあけて眺望の良い台地縁辺部に並び、岡崎古墳群中でも中心的な首長墳であるとみられる。

二　岡崎十八号墳

(1)　墳丘・墳頂の調査

直径約二〇メートルの円墳で、現存高は約二・四メートルを測る。葺石・埴輪等の外表構造物はない。本来の墳丘は相当量流失しており、また墳端部では、一・二メートルほど流土が堆積している。段築等は確認できない。墳丘外周には周溝状の掘りくぼみがある。ただし、明瞭な掘り込みではない。最大の特徴は、墳端部にとりつく三基の地下式横穴墓である。位置関係から墳丘築造後、墳裾に企画配置されたと考えられる。これらはいずれも玄室を墳丘側に向かって構築している。



岡崎古墳群

墳頂部では埋葬施設を確認できなかった。墳丘上部の土は著しく流失しており、埋葬施設は早い段階に流失したか、破壊されたと考えられる。

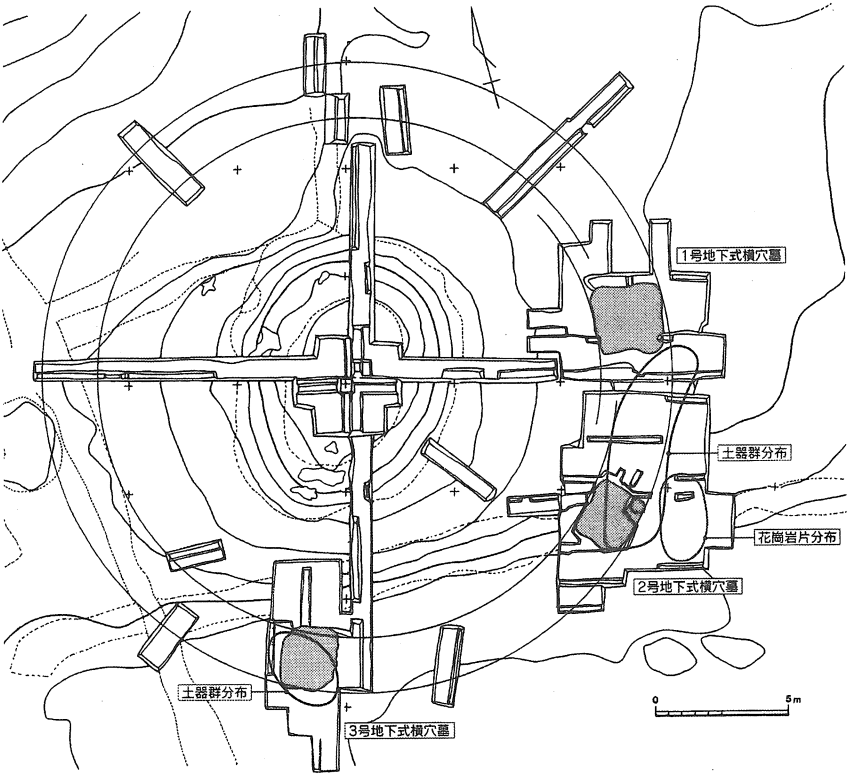
（2）　墳丘東側祭祀空間

東側の墳丘裾部で土器を用いた祭祀空間が良好な状態で出土した。土器は細片化しており、意図的に破砕されたと考えられる。須恵器大甕・瓿（はそう）・樽形瓿と土師器高杯を中心として、土師器壺・小壺・鉢、在地の古墳時代土器である成川式の壺などがある。須恵器大甕はＴＫ７３型式に位置づけられる。整理途中であるが、高杯は十個体確認している。また、先端部の破損した圭頭鏃も一本出ました。

須恵器大甕は2号地下式横穴墓の竪杭上面コーナー部に設置されており、この地下式横穴墓を埋めた後の祭祀に伴なうものである。

（3）　1号地下式横穴墓

竪杭　上面の平面形は正方形に近く、埋め戻しには四段階の工程が確認でき



岡崎18号墳　墳丘平面図

る丁寧なものであった。閉塞は羨門（せんもん）部に花崗岩板石を平積みした後、それに大型の一枚石を乗せ、立てかけて密閉する。さらに閉塞石は粘土で被覆する。南東部コーナーには削りだしたステップがある。また、東壁にもステップ状のくぼみがあり、竪坑構築作業に関わるものと考えられる。

羨道　羨門には方形に刳り込んだ段を有し、長方形に開口する。羨道天井部は玄室に向かって段をもちながら斜めに上がる。

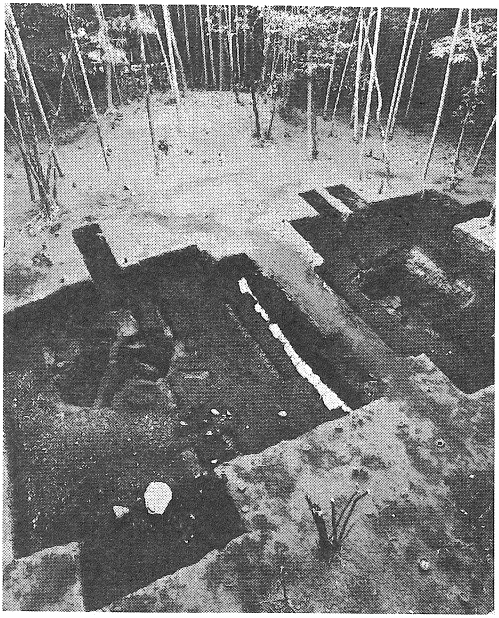
玄室　玄室は平入りで切り妻家形をなし、大棟は突帯、軒は段差を削り出し細部を造っている。

天井・壁には二種類の工具による加工痕が明瞭に残っている。内部には花崗岩製の箱式石棺を安置し、北頭位で一体の埋葬があった。

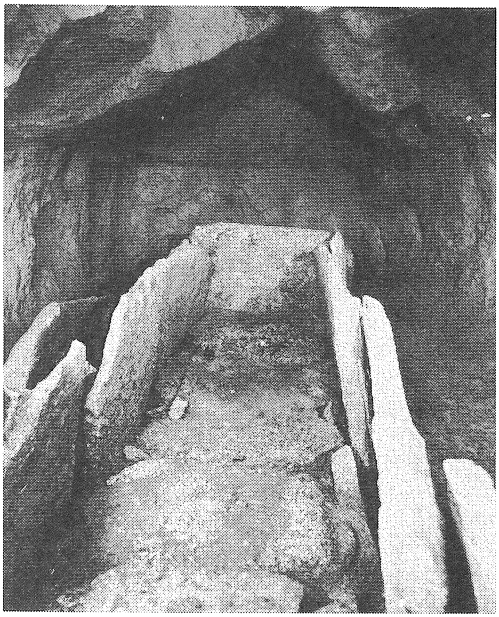
副葬品　副葬品は棺内に剣二・鉄斧一・刀子一・鑷子一、棺外に鉄鋌（てってい）二・剣一・U字形鍬鋤先一があり、頭部には水銀朱を散布していた。人骨の残りは悪く、性別や形質に関わる情報は確認できない。棺外には一部にベンガラが散布されていた。

（4）　**2号地下式横穴墓**

竪坑・羨道　平面形は横長長方形の竪坑である。竪坑・羨道の構造は1号とほぼ同様であるが、ここでは竪坑埋



岡崎18号墳　墳丘と地下式横穴墓



1号地下式横穴墓　玄室と石棺

め戻しの過程で相当量の赤色顔料を散布しており、埋土中各所から赤色顔料が出土した。また竪坑外東側には花崗岩片が散在し、石棺の最終調整を竪坑前で行ったことが判明した。

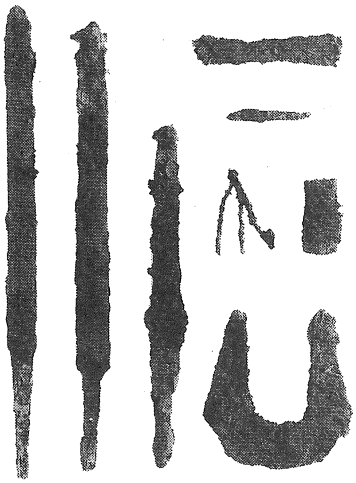
玄室　玄室は平入りの寄せ棟家形である。天井・壁面全体に赤色顔料が塗布されていたことは特筆できる。玄室内には花崗岩製の箱式石棺を安置し、北東頭位で一体埋葬されていた。石棺は内面全体、外面下半部に赤色顔料を塗布していた。

副葬品　副葬品はすべて棺内にあり、鉄剣・鉄斧・方形鍬鋤先・刀子・イモガイ製腕輪、用途不明の錫片が各一点出土した。頭部には水銀朱を散布し、頭部側小口付近には藁状の繊維束を置いていた。人骨は、やや形状を残し、成年女性とみられる。竪坑中、玄室内・石棺塗布の赤色顔料はベンガラである。

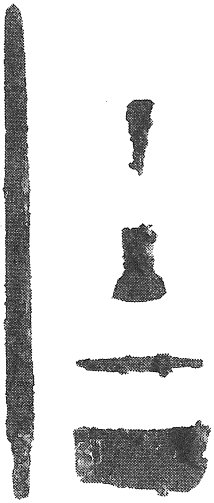
(5)　3号地下式横穴墓

竪坑上面からは意図的に破砕されたとみられる土師器壺二個体が出土した。初期須恵器の大甕胴部片も一点出土している。また、二号よりは少ないが、赤色顔料を竪坑埋土中に散布していた。掘り下げは粘土被覆上面まで行い、閉塞石は一部を確認している。

竪坑上面の平面形は角が不明瞭で、不整形な長方形であること、肩部の傾斜が緩やかなこと、羨門に段状刳り込みがなく、平坦面にそのまま閉塞石を立てかけてること、これらは1・2号



1号地下式横穴墓出土鉄製品



2号地下式横穴墓出土鉄製品

地下式横穴墓との違いである。

三　岡崎十八号墳調査成果のまとめ

岡崎古墳群における築造動向　岡崎古墳群では古墳時代中期初頭に前方後円墳から古墳築造を開始するが、岡崎十八号墳の築造を契機として、首長墓に円墳と地下式横穴墓の従属葬という組み合わせが導入される。この段階を首長墳における地域的独自性発現の画期と理解できる。

古墳と地下式横穴墓　古墳の周溝を利用して竪坑を築く地下式横穴墓はこれまでに鹿児島・宮崎で数基確認されているが、多くは古墳時代後期に属していた。ここでは地下式横穴墓の出現段階に近いＴＫ７３型式段階から古墳従属葬として存在し、早くから多様なあり方・性格差が存在したことを明らかにした。

また、地下式横穴墓は中期前半代に出現する墓制であるが、岡崎十八号墳では大隅における出現年代の定点を初めて確認した。また、平入り家形玄室が初期段階から存在することを明確なものとした。

花崗岩製石棺　肝属平野で花崗岩石材の埋葬施設は、唐仁大塚古墳・横瀬古墳・岡崎十五号墳など一部の首長墳にしかみられない。岡崎十八号墳の石棺にも首長層の階層構造が反映されている可能性が高い。

交流をめぐる問題　初期須恵器は広域流通物資であり、また鉄鋌や出現期のＵ字形鍬鋤先など朝鮮半島系文物、琉球列島産イモガイ製貝釧も出土した。鉄鋌は南九州では初出土である。

地下式横穴墓に葬られた首長層は単に南九州の地域的な閉鎖性から独自の墓制を生み出したのではなく、広域に連なる情報を入手し、前方後円墳を中心とする政治的な秩序を熟知した上でこの墓制を選択したのである。

肝属平野における古墳時代社会構造　岡崎十八号墳の成果は首長層における前方後円墳以外の選択肢の存在と南九州の地域的独自性の発現過程を明確にするものである。岡崎古墳群は、この地域の唐仁古墳群や横瀬古墳といった巨大前方後円墳築造期に併行し、それらに次ぐ地位の首長墳とみられる。唐仁や横瀬付近には地下式横穴墓はないから、古墳と地下式横穴墓の共存化も中・下位首長層のもとで起こった可能性が考えられよう。また、これら首長層にまで広域流通財が供給されており、肝属平野でも古墳時代中期には列島の政治的・社会的共有圏に属していたことが読みとれる。

一方で、最終的には律令国家により、異民族・隼人とみなされる列島社会との乖離の兆しが墓制などにおいて古墳時代中期に始まり、後期に明瞭化して行くものとみられよう。

古墳築造南限の肝属平野の古墳とそれを取り巻く文物のあり方は、古墳時代社会の構造を読みとる上で大きな役割を担いうるものである。今後、一層

その意義を明らかにして行きたい。

四　調査後記
―保存・公開の困難さ

古墳時代の南九州に独自の墓制である地下式横穴墓の調査は私自身、岡崎十八号墳が初めてであった。そこで直面した若干の問題を付記したい。

岡崎十八号墳では墳丘裾部に地下式横穴墓があった。とくに調査で苦心したのは水の進入である。調査区で一段下げ、さらに墳丘端の一番低い位置に竪坑がある。そこからさらに一・八メートルも掘り下げる。調査中は何とか大雨からも護る努力をした。夜中でも水抜き作業に宿舎から飛び出したことも一、二度ではない。この水まわりが地下式横穴墓の保存・公開などが難しい最大の問題である。

また、土を掘り込み構築しているために、状態の安定化が難しい。これらは一般的にそれほど強固ではない土壌に構築されており、天井部を中心に崩落の危険性はきわめて高い。さらに、垂直に掘り込まれた竪坑を壊さずに見学進入路を造るのは困難である。

現在、地下式横穴墓の確認総数は約一千基に達するが、保存・公開されているのは宮崎県の西都市西都原四号、小林市東二原八号・十一号の計三基の地下式横穴墓のみである。西都原では地上施設から土嚢を足場に敷き組み立てた支保工に護られる玄室内をカメラを動かして見学するものであり、東二原十一号は天井を、八号は竪坑を見学できるようにカットしている。また、公開十年を経た東二原では崩落・カビ・処理樹脂の変質もみられる。

それぞれ工夫はされているが、地下式横穴墓の保存と公開の難しさを実感するものでもある。その建築から維持のコストも大きな問題であろう。

また、構造上、移築保存はあり得ず、レプリカ作成も型が抜けず破壊を前提とする。一般的に地下式横穴墓の保存・公開は将来的にもきわめて困難であり、見学の機会は調査中に限られるという現状は変わらないであろう。

岡崎十八号墳の地下式横穴墓ではシラスを購入し、土嚢袋に入れて玄室内部を充填し保存策を講じたが、基本的には、もう再び見ることはないのではないかと思う。

それだけに調査中の公開の重要性と、調査に対する責任の重さを一層深くかみしめている。